

スマホ利用のライフスタイルアプローチ（１）

ー シニアの友人との交流 対面・非対面での比較ー

○水野 一成¹ 飽戸 弘²

¹NTTドコモ モバイル社会研究所 ²東京大学名誉教授

1. 研究背景及び研究目的

モバイル社会研究所の調査では、2015 年からシニア層（本研究では 60 代、70 代を対象）の ICT 利活用に関する調査研究を始めた。2015 年時はスマートフォン（以下、スマホ）所有率は、60 代で 3 割、70 代はわずか 1 割であった。そこから、毎年 10 ポイント前後上昇し、2022 年 1 月では 60 代は 9 割、70 代で 7 割[1]と多くのシニアがスマートフォンを持っている状況に変化した。シニアがスマートフォンなど ICT を活用し、人との交流を持つことには様々な効果があることが報告されている。太田らは、高齢者がインターネットを友人や家族とのコミュニケーションで利用することで、健康度自己評価や幸福度が高いことを縦断研究より明らかにしている[2]。更にスマートフォンをコミュニケーションの機器として利用していると 63 歳以上のシニアは、利用していない層と比較して、幸福感が高いという同様の報告が海外でもなされている[3]。そして、高齢者が社会活動を通じて、人との交流がある場合、その後の社会的孤立を防いでいる[4]。このように高齢者が対面・非対面で人との交流を行うことで得られる影響については様々な報告はされているが、対面交流と非対面交流を比較或いは特性の差異をレビューした研究はあまりなされていない。本稿ではシニアの友人との交流に着眼し、対面（旅行や趣味の集まり、外食などの交流）、非対面（電話やメール）の状況を調査した。その調査結果の分析により、第一に対面交流と非対面交流を実施している人の特性に差異は見られるのか、第二に仮に見られる場合には、そのような差異が見られるかを本稿の目的とし報告する。

2. 調査概要

調査時期：2022 年 1 月 調査対象：関東一都六県、60～79 歳男女 調査方法：訪問留置調査

標本抽出法：QUOTA SAMPLING 性別(5 歳刻み)・年齢・エリアで割付 709 サンプル回収

3. 分析手法

シニアの友人との交流を①対面（食事や趣味）②非対面（電話やメール）を調査した結果より、それぞれ、「交流している」「交流していない」2 群に分ける。その群を目的変数（①対面交流：積極派 50.5%と消極派 49.5%）（②非対面交流：積極派 52.8%と消極派 47.2%）し、数量化理論第Ⅱ類を用い分析を実施。偏相関係数及びカテゴリーのスコアを見ながらそれぞれの群の特性を明らかにする。また、2 つの分析の比較を行い、本稿の研究目的である、対面・非対面積極派の共通・相違点を考察していく。

4. 分析結果

上記の通り、目的変数は交流積極派、消極派の 2 群とした。説明変数は①対面交流②非対面交流とも同じ変数をとし、ライフスタイル・ICT に関連する変数と属性、計 12 の設問とした（表 1）。

表 1:説明変数の概要

大別	変数
ライフ スタイル	①教室への参加(※2) ②地域活動への参加(※3) ③近所付き合い ④生活への満足度(※1) ⑤イノベータ得点[4] ⑥経済的ゆとり
ICT	⑦スマートフォン・ケータイ所有 ⑧メッセージサービスの利用 ⑨SNS の利用
属性	⑩性別 ⑪年代 ⑫職業

※1) 10 点満点で自己評価 1 高得点 9～10 点 2 中得点 6～8 点 3 低得点 5 点以下

※2) 教養・芸術（音楽・手芸など）・料理などのカルチャースクール・教室・地域サークルへの参加、或いは体操・ヨガ・ダンスなどの体を動かすカルチャースクール・教室・地域サークル・スポーツクラブ

※3) 自治体・町内会・老人会或いは奉仕活動への参加、或いは有償・無償問わず、奉仕活動、ボランティア活動への参加

なお、目的変数と説明変数の相関係数はそれぞれ最大①対面交流 0.29(教室への参加)②非対面交流 0.38（メッセージサービスの利用）であり、目的変数と説明変数の間ではおよそ独立していることが確認できた。次に、分析モデルの精度ついてであるが、①対面交流では判別の中率 67.4%、相関比 η^2 0.17、②非対面交流は判別の中率 71.9%、相関比 η^2 0.29 であり、決して高くはない精度ではあるが、カテゴリースコアをみると、一定の傾向が確認できたため、その点を中心に本稿で説明していく。

次にカテゴリースコアについての基本部分について、判別グラフ及び各群の平均値を用いて説明する。①対面交流において各群の平均値は、1 群「積極派」0.41、2 群「消極派」-0.42 となり、判別グラフからも、正の方向に「積極派」、負の方向に「消極派」に分かれた。②非対面交流においての各群の平均値は、1 群「積極派」0.51、2 群「消極派」-0.56 となり、判別グラフからも、正の方向に「積極派」、負の方向に「消極派」に分かれた。

偏相関係数及び、カテゴリースコアについて、確認していく。図 1 は偏相関係数が高い順に説明変数を並び替え、カテゴリースコアを表示させた（左図は①対面交流、右図は②非対面交流）。

①対面交流において、最も高い偏相関係数であった説明変数は「教室活動への参加」であった。カルチャースクール（種は問わない）へ参加（時々参加も含む）している高齢層は対面交流が活発であった。次いで「生活への満足」で満足度が極端に低くない人は積極派であった。また、「スマホを所有している」「近所付き合いをしている」「女性」が積極派に傾いた。

②非対面交流では、最も高い偏相関係数であった説明変数は「メッセージサービス（メールやLINE）の利用が多い」高齢層が積極派であった。続いて「女性」「教室の参加が多い（時々ではない）」「（自治会・町内会・奉仕活動など）地域活動への参加が多い（時々ではない）」「スマホを所有している」が非対面交流積極派に傾いた。

なお、両分析とも「年代」「イノベータ度」「(Twitter・FaceBook などの) SNS の利活用)」については、偏相関係数が低い。非対面交流では、同じスマートフォン等で利用するサービスにおいて、「メッセージサービス」の利用有無は強い関係を見せたが、「SNS の利用」は関係が小さい。このことから、非対面交流の活発な人であっても、その活動を不特定多数に共有する段階には入っていないことが推測される。

左図：対面交流（友人との趣味や旅行、外食） 右図：非対面交流（友人との電話・メール）

				対面交流						非対面交流										
アイテム名		カテゴリー名	n	積極派	偏相関係数		カテゴリースコア				積極派	偏相関係数		カテゴリースコア						
							-1.00	消極派	=	0.00	積極派				-1.00	消極派	=	0.00	積極派	1.00
ライフスタイル	教室活動への参加	参加	164	71.3%	1位	0.18					0.63	77.4%	3位	0.17					0.51	
		時々	101	63.4%						0.42	60.4%					0.03				
		非参加	444	39.9%			-0.33			41.9%		-0.20								
	地域活動への参加	参加	197	62.9%	7位	0.08					0.24	67.5%	4位	0.13					0.36	
		時々	197	48.7%			-0.26			0.01	55.3%				-0.07					
		非参加	315	43.8%						41.9%		-0.18								
	近所付き合い	あり	453	58.1%	4位	0.13					0.22	59.4%	7位	0.10					0.12	
		なし	256	37.1%			-0.39			41.0%		-0.22								
	生活への満足	高い	109	63.3%	2位	0.16					0.24	63.3%	10位	0.05					0.08	
		やや高い	327	53.2%						0.08	55.0%				0.00					
		やや低い	186	48.9%						0.16	46.8%					0.05				
		低い	87	27.6%			-0.97			43.7%		-0.19								
	イノベーション度	高い	98	61.2%	10位	0.06					0.35	62.2%	11位	0.05					-0.01	
		中間	384	49.7%			-0.07			55.5%					0.06					
		低い	227	47.1%			-0.03			44.1%		-0.10								
経済的ゆとり	ある	59	59.3%	6位	0.09					0.37	47.5%	8位	0.08					-0.03		
	ある程度	341	54.8%			-0.06			59.2%					0.04						
	あまり	211	45.0%			-0.19			46.9%		-0.16									
	ない	98	41.8%					0.39	45.9%					0.22						
ICT	スマホ・ケータイ所有	スマホ	567	55.0%	3位	0.13					0.15	59.3%	5位	0.12					0.09	
		ケータイ	102	38.2%			-0.34			33.3%		-0.19								
		未所有	40	17.5%			-1.24			10.0%		-0.74								
	メッセージサービス	多い	128	56.3%	12位	0.03					0.05	82.8%	1位	0.24					0.86	
		中間	204	55.4%						0.05	61.8%					0.20				
		少ない	217	53.0%						0.03	46.5%				-0.27					
		ない	160	36.3%			-0.16			25.6%		-0.59								
SNS利活用	多い	44	61.4%	9位	0.07					0.51	79.5%	12位	0.04					0.16		
	少ない	72	61.1%						0.23	69.4%					0.15					
	ない	593	48.4%			-0.07			48.7%		-0.03									
属性	性別	男性	342	43.0%	5位	0.09					-0.23	40.6%	2位	0.21					-0.39	
		女性	367	57.5%						0.21	64.0%					0.36				
	年代	60代前半	165	49.1%	8位	0.08					-0.10	62.4%	9位	0.06					-0.01	
		60代後半	176	47.7%			-0.25			51.7%		-0.13								
		70代前半	208	51.9%						0.11	49.0%				-0.01					
		70代後半	160	53.1%						0.23	48.8%					0.17				
	職業	正規	105	43.8%	11位	0.04					-0.07	61.0%	6位	0.11					0.44	
自営・自由		114	54.4%						0.15	51.8%					0.01					
パート・バイト		127	49.6%	-0.12					58.3%			0.03								
	無職・主婦	363	51.5%					0.01	48.8%					-0.14						

図1 カテゴリースコア及び偏相関係数

5. 考察

それぞれのカテゴリースコア及び偏相関係数から、対面交流・非対面交流の積極派に「共通点」「類似点」「相違点」をまとめたのが表2である。一部では共通した部分も見られたが、それぞれ別の結果も見られ、対面・非対面の積極派は、同じような特性ではないことが、明らかになった。

最初に積極派に共通している点は、「スマホを所有している」であった。これは、冒頭説明した通り、シニア世代でもスマホが普及したことにより、同世代が共通して利用しているツールとも言え、人との交流を行う際も、利用されている。

また類似点では、対面での交流がより盛んな層（カルチャースクールや地域活動）と非対面交流を

積極的に実施している層と重なり、対面交流積極派は「地域での活動」も積極的に参加している。また、非対面交流が盛んな層は「メール・LINE」の利用頻度が多い。このことから、元々対面交流が盛んであった層に「メールやLINE」といった新しいツール、さらにコロナ禍という制約（環境の変化）があり、非対面交流の活性が見られたのではないかと推測される。

私たちが過去に報告した結果によれば、スマートフォンなどICTを利活用することで、人とのつながりが変化（既存の関係の深化、新たな関係の拡大）したのは、日々の活動が活発な人であった[6]。今回の分析結果と合わせて考えると、日々の活動が活発な人は、非対面での交流も盛んであり、その結果、人のつながりが深化・拡大したと推測される。

表2 対面・非対面交流 積極派の特性を比較

	積極派の特徴
共通点	スマートフォンを所有している割合が多い
類似点	教室への参加：対面交流・・・参加している（時々を含む） 非対面交流・・・参加している（時々を含まない） 性別：対面交流・・・女性がやや多い 非対面交流・・・女性が多い
相違点	対面交流・・・生活への満足度が極端に低くない、近所付き合いをしている 非対面交流・・・メール、LINEの利用が多い、地域活動に参加している

また、性差に着眼すると男性において直近の高齢層になればなるほど、社会関係が縮小しており、その男女差が拡大している[7]。今回の調査結果の中では、対面交流よりも非対面交流の方がより男女差がみられ、女性が活発であった。非対面交流が今後益々活性化した場合、男女差が広がっていくか、引き続き調査研究を続けていきたい。

6. 参考文献

- [1] <https://www.moba-ken.jp/project/seniors/seniors20220411.html> (2022. 4. 11)
- [2] 太田康博・斉藤雅茂・中込敦士・近藤克則(2022)高齢者のインターネット利用と健康・幸福感の関連『老年社会科学 第38巻第3号』, 337-344
- [3] AnjaStevic・DesireeSchmuck・JorgMatthes・Kathrin Karasay(2021) ‘Age Matters’ :A panel study investigating the influences of communicative and passive smartphone use on well-being 『Behaviour & Information Technology2021, VOL 40, No. 2』, 176-190
- [4] 江尻愛美・河合恒・藤原佳典・井原一成・平野浩彦・小島基永・大淵修一(2018)都市高齢者における社会的孤立の予測要因：前向きコホート研究『第65巻日本公衛誌第3号』, 125-133
- [5] 飽戸弘(1987)『社会調査ハンドブック』日本経済新聞社, 300-301
- [6] 飽戸弘・吉良文夫・水野一成(2016) シニアのICT利用に関するライフスタイルアプローチ(1) —シニアの「日々の活動」と「人間関係」による類型化の試み— 『日本行動計量学会 第44回大会抄録集』, 384-387
- [7] 小林江里香(2016) 高齢者の社会関係における世代的・時代的变化—全国高齢者の長期縦断研究から—『老年社会科学 第38巻第3号』, 337-344